

熊取町の外国語活動（英語）の取り組み —大阪府使える英語プロジェクト事業を通して—

齊藤貴英（SAITO Takahide）

大阪府泉南郡熊取町教育委員会

要約

熊取町においては、以前より外国語教育を充実させてきた。具体的には、平成 14 年度から北小学校で外国語活動の研究を開始し、平成 23 年度からは、熊取南中学校と東小学校が大阪府教育委員会より「使える英語プロジェクト事業」研究校に指定され、英語授業の充実をさらに研究してきた。本稿においては、熊取町が取り組んできた外国語活動の取り組みを紹介するとともに、そこから見えてきた成果と課題を提示する。

（キーワード：小学校外国語活動，英語を日常化する取組，使える英語プロジェクト）

1. はじめに

熊取町は平成 14 年から外国語活動の研究を開始し、現在では 8 小・中学校に 4 人のネイティブスピーカーを NET（Native English Teacher）として、3 人の英語が堪能な JTE（Japanese Teacher of English）を外国語指導助手として配置し、小学校の英語教科化に向けた取り組み、実践を行っている。熊取町が外国語活動研究校に指定した町立北小学校においては、独自のカリキュラムで全教職員が組織的に小学校低学年から外国語学習を開始している。

また平成 23 年度から、熊取町立東小学校と熊取南中学校が大阪府教育委員会より「使える英語プロジェクト事業」研究指定校となり 3 年間の研究を行った。その研究の実践内容を記すとともに、そこから見えてきた成果と課題を考察する。

2. 熊取町における外国語活動の取組

2.1 熊取町立北小学校の実践

平成 14 年度から、「英語で伝え合う力を育て、それを活用する力の実践」を目標に外国語活動の研究を開始した。北小学校の外国語活動は、平成 25 年度で 10 年以上経

過し、今の形ができるまでに多くの試行錯誤があり、現在も課題はあるが、低学年から高学年まで全校体制で組織的に外国語教育活動を推進している。またネイティブスピーカーを週2回派遣するとともに、研究授業・公開授業の実施やカリキュラムの作成、また全校的に英語を楽しみながら日常化する工夫や学級担任中心の授業づくり、英語ルームの整備や教材・教具の共有などを有効に行っている。以下、北小学校の事例を紹介するとともに成果と課題も考察する。

2.2 外国語活動の目標

北小学校の外国語活動の目標は以下の2点である。

- (1) 国際社会の中で日本人としての自覚を持ち、主体的に生きていくために必要な実践的な能力や資質、態度の育成
- (2) 国際理解教育の一環として英語活動を取り入れ、英語や文化に対する興味・関心やコミュニケーションを楽しみ、自分の思いを表現しようとする態度と意欲の育成

上記の目標を達成するために、外国語活動担当者を中心に低学年から高学年までのカリキュラムを作成した。カリキュラムの作成には、ネイティブスピーカーのアイデアも多く取り入れた。低学年では、「体」を動かす活動を中心に年間10時間程度の授業を行い、中学年では「口」を動かす活動を中心に年間10時間程度、高学年では「頭」を動かす授業を中心に年間35時間程度の発達段階に応じた指導を行っている。全学年の教職員が担当、また低学年から行うことにより、教職員の意欲や能力も高まり、楽しみながら授業を行うことができています。

2.3 具体的な実践例～英語を日常化する取組～

北小学校では、授業以外にも児童の学習意欲を向上させるために、英語を日常化する取組みが行われている。ここでは、4つの「外国語を日常化する取組み」を紹介する。

(1) ひとくち英語



〈図1〉ひとくち英語

北小学校の児童玄関に、毎月の一語英語が掲示されている(図1)。例えば、6月「June」、ベストを尽くしてね「Do your best」、うれしい「I am happy」、あきらめるな「Never give up」等、簡単な英語表現を掲示している。児童玄関に掲示しているので、低学年から高学年まで全校児童が登下校中に見ることができまた日常的に使う表現を精選して掲示することにより、外国語学習に対する雰囲気作りを組織的に行っている。

(2) 英語の歌



〈図2〉 英語の歌

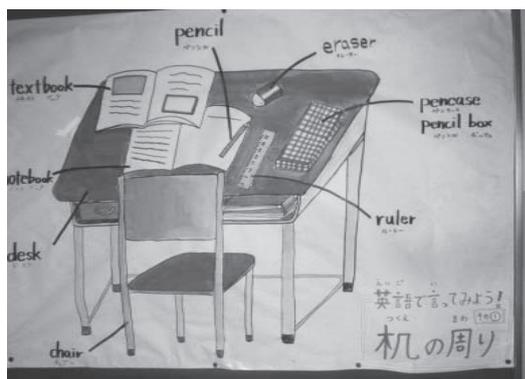
毎月の英語の歌を決め、朝・給食の時間に放送している。5・6年生児童には英語の歌詞カードを配り、1～4年生児童には歌詞をクラスに掲示して、いつでも英語の歌を聴いて歌うことのできる体制を組織的に作っている(図2)。英語の歌を毎日聴くことにより、英語のリズム、イントネーションや発音等に慣れることができ、スムーズに外国語活動の授業に取り組むことができている。

(3) 英語でいってみよう

平成25年度からの取り組みで、2ヶ月に1度、単語のテーマを決めて掲示している(図3)。4・5月のテーマは「机の周り」で、日常的に子どもたちが使用している「机のまわり」にある教科書・消しゴム・鉛筆などの英語を絵で表し、それぞれに対応する英語を書いている。児童たちは、この掲示物みることにより、自分たちが日頃使っている物の英語での言い方に慣れ親しむことができる。

(4) 外国人にインタビューしよう

6年生には、春の遠足で日頃学習した英文を使って外国人にインタビューする宿題を出している(図4)。“Where are you from?”(あなたの出身はどこですか)、“What kind of Japanese food do you like?”(あなたの好きな日本の食べ物は何ですか)等の授業で学習した表現を使いながら、児童たちは遠足で会った外国人にインタビューを楽しみながら行っている。



〈図3〉 英語でいってみよう



〈図4〉 外国人にインタビューしよう

(1)～(4)は英語を日常化する取り組みであり、英語を身近な「ツール」として児童たちに捉えさせるとともに、学習意欲を喚起させる工夫を学校全体で行っている。

また、授業で子どもたちに人気のある漫画「One Piece(ワン・ピース)」の英語版等を使って、児童の関心を高める導入を工夫している。One Piece (ワン・ピース) のセリフを覚えている児童も多いので、その覚えていたセリフを英文で表現する事に興味を示す場面も多く見受けられた。

英語を日常化していくためには、児童の興味・関心を引きつける素材等が大切であり、また担当者の負担のかからない範囲で取組を継続させることが大切である。また、英語表現を耳で聞かないと話せるようにはならないので、多くの良い英文に音で慣れ親しませる事を意識している。授業以外でも、全校体制でこのような取組を行うことによって、授業に対する意欲を向上させる事ができ、理解の定着にもつながっている。

2.4 成果と課題

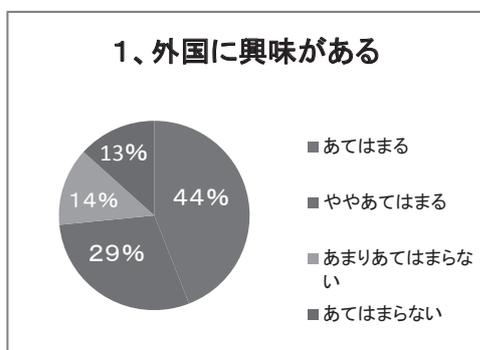
北小学校の外国語活動の成果と課題を検証するために、小学校を卒業した中学校1年生生徒143名を対象にアンケートを行った(平成25年10月11日実施)。

(1) 成果

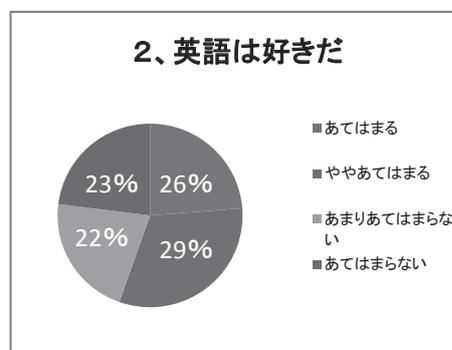
成果としては、以下の4点の数値が比較的高い事がわかった。

①「外国に興味がある」という質問に肯定的に答えた生徒は、143名中105名であり73%という高い割合であった(図5)。これは、小学校からの外国語教育の成果である可能性が高い。中学校1年生のこの時期においても、比較的高い数値がでている。この部分が低いと個々の英語能力の向上には結びつかない。

②「英語は好きだ」という質問に肯定的に答えた生徒は、143名中80名であり55%という過半数を超えた割合であった(図6)。中学校1年生の2学期は英語嫌いが増えていく状況が多い中、一定割合の好意性を維持している。過半数以上が肯定的に回答しているが、約45%が否定的に回答をしている。「興味はあるが好きではない」と答えている生徒が約18%いるので、この割合を低くしている可能性がある取組を分析し、検討をしていく必要がある。



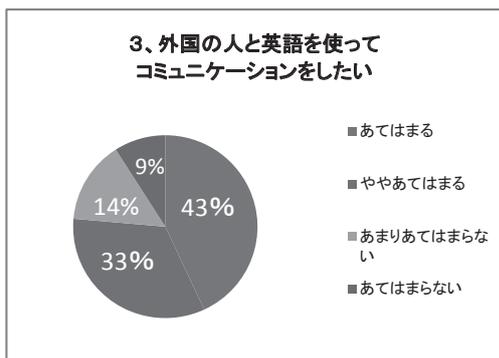
〈図5〉外国に興味がある



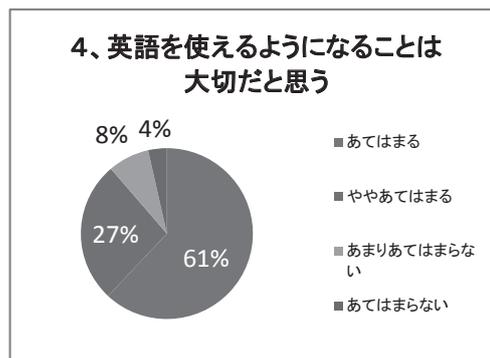
〈図6〉英語は好きだ

③「外国の人と英語を使ってコミュニケーションしたい」という質問に肯定的に答えた生徒は、143名中109名であり76%という高い割合であった(図7)。これは、すべての小中学校にネイティブスピーカーを配置しているところから、コミュニケーションのイメージがしやすく意識が高まっていると考えられる。

④「英語を使えるようになることは大切だと思う」という質問に肯定的に答えた生徒は、143名中126名であり88%という非常に高い割合であった(図8)。多くの生徒がこのように答えている理由として、小学校から外国語教育を行い、ネイティブスピーカーと常にコミュニケーションをとることのできる環境がこの数値に表れている。



〈図7〉外国の人と英語を使ってコミュニケーションをしたい



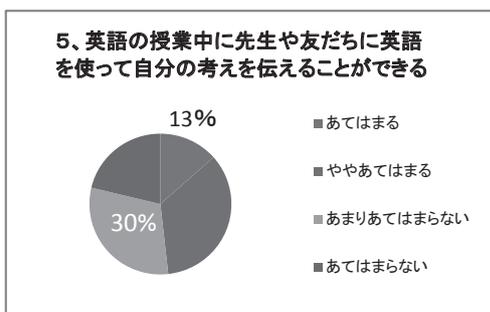
〈図8〉英語を使えるようになることは大切だと思う

(2) 課題

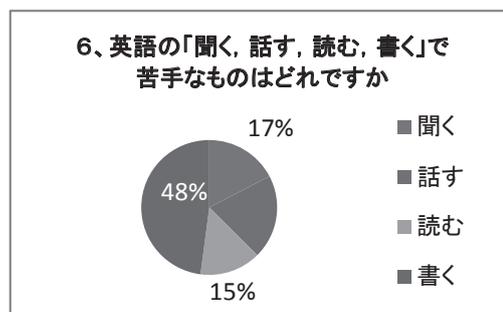
課題としては、以下の部分があげられる。

⑤「英語の授業中に先生や友だちに英語を使って自分の考えを伝えることができる」という問いに対して、肯定的な回答は143名中67名で割合は約47%、否定的な回答は143名中76名で割合は約53%であった(図9)。半数以上が否定的な回答をしている。「自分の考えを英語で伝える」ために、日常で使う英語表現を今以上学習していく必要がある。

⑥「英語の「聞く、話す、読む、書く」で苦手なものはどれですか」という問いに対して、「書く」ことが苦手であると答えた生徒が143名中69名で割合は約48%であった(図10)。小学校で「書く」指導をしていないので、中学校の授業での理解度の低下や好意性の低下が生じている可能性がある。小中の段差を解消するために、適切な「書く指導」を行う必要がある。



〈図9〉英語の授業中に先生や友だちに英語を使って自分の考えを伝えることができる

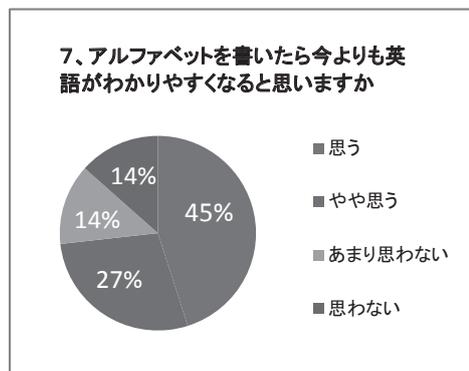


〈図10〉英語の「聞く、話す、読む、書く」で苦手なものはどれですか

⑦「アルファベットを書いたら今よりも英語がわかりやすくなると思いますか」という問いに対して、「思う」「やや思う」と答えた生徒は 143 名中 103 名で約 72%であった（図 11）。アルファベットの大文字や小文字，スポーツや食べ物，職業や教科等の簡単な英語や基本的な英文を小学校で学ぶ事により，理解度の向上が見込まれる可能性がある。英語の 4 技能のバランスの良い育成が必要である。

以上の結果から，北小学校の外国語活動の成果として，「児童たちの外国や英語についての興味・関心・意欲」また「英語を使つてのコミュニケーションの必要性」等の高い数値があげられる。

しかし，課題として「英語で自分の考えを表現する工夫」や「アルファベット等英語を書く指導」等の部分があげられる。熊取町においては，数年前から全小学校に「フォニックス」学習を導入して，音と文字のつながりを学習しているが，文字を「書く」指導は行っていないので，今後はこの部分の工夫が必要である。



〈図 11〉 アルファベットを書いたら今よりも英語がわかりやすくなると思いますか

3. 熊取町立北小学校の実践を基盤とした熊取町全体の取組

3.1 概要

熊取町では，平成 14 年度から外国語活動を研究してきたが平成 23 年度より大阪府教育委員会に研究推進校として，熊取町立熊取南中学校・熊取町立東小学校が指定され，さらに取組の充実や研究改善を行ってきた。この 2 校を熊取町内の（北小学校以外の）パイロット校として，町内の小中学校に取組を普及するとともに，小中連携した外国語活動のさらなる充実を目標に，取組を進めてきた。熊取町の取組の内容や成果と課題を考察する。

使える英語プロジェクト事業とは，義務教育終了段階で自分の考えや意見を英語で伝えられる生徒の育成や英語の 4 技能（聞く・話す・読む・書く）をバランス良く育む授業改善を行い，また家庭学習教材等を開発し自学自習力を育むことを目標に大阪府教育委員会が府内 50 中学校区を実践研究校に指定し，研究を行うものである。本町においては熊取南中学校と東小学校が研究推進校に指定され，平成 23 年～平成 25 年の 3 年間研究を行ってきた。同一中学校区において 3 年間で 500 万円以上の補助金交付があり，英語教室の整備や ICT の活用，ネイティブスピーカーとの授業の工夫，年 1 回の公開授業や研究討議等を行うこと，また中学校においては，教科書準拠家庭学習音声 CD を全生徒に配布をしたり，英語能力判定テストの受験も義務づけられている。熊取町においては，本事業を「外国語活動や小中連携した外国語教育のさらなる充実」の機会としてとらえながら研究を進めてきたが，以下その内容を一部報告する。

3.2 熊取町立東小学校の実践

熊取町立東小学校は、平成 18 年度からネイティブスピーカーと外国語指導助手中心の外国語授業を開始し、研究を行ってきた。平成 20 年度からは学級担任中心の授業づくりを行い、平成 23 年度からは「使える英語プロジェクト事業研究推進校」に指定され、外国語活動の研究を行ってきた。平成 23 年度末には、大阪府教育センターで実践研究校の小学校の代表として取組を発表した。

研究指定校としての大きな成果は、①授業の流れの確立（カリキュラムの作成）②教材・教具の充実③教職員の力量向上・児童の学習意欲の向上があげられる。①授業の流れの確立については、以前の東小学校においては丁寧なカリキュラムは存在せず、研究推進校となってから、ネイティブスピーカーと外国語指導助手、そして学級担任の役割分担をキーワードに、毎週 1 回丁寧な打ち合わせを行い、それぞれの役割を分担しながら学級担任が中心の授業づくりを考えてきた。

授業の流れの確立は、次の 5 点を中心に改善を進めた。

- ① **授業内容と本時の目標（ゴール）の提示**：本時の授業における達成目標を明確化するためにゴールを毎時間提示することにより、児童も視覚的に学ぶ内容を確認できるように工夫を行っている。
- ② **日直による英語での挨拶**：外国語活動の授業の始まりに頭のスイッチを切り替えるために日直による英語の挨拶を毎回行っている（図 13）。挨拶の質問内容は、中学校の英語の挨拶の表現と連携をしている。こうすることにより多く児童に発表の機会が与えられ、中学校との連携も行うことができる。

（例）日直が英語で挨拶をしている内容

- | | |
|------------------------------------|-----------------|
| (A) (名前) My name is_____. | (私の名前は～です) |
| (B) (挨拶) Good morning,_____. | (おはようございます。～さん) |
| (C) (調子をきく) How are you today? | (調子はどうですか) |
| —I'm () (thank you) . | (～です。ありがとう) |
| (D) (日付) What is the date today? | (今日の日付は何ですか) |
| —It's (month) (date). | (何月何日です) |
| (E) (曜日) What day is it today? | (今日は何曜日ですか) |
| —It's (weekday). | (○曜日です) |
| (F) (天気) How is the weather today? | (今日の天気はどうですか) |
| —It's () and () . | (○そして○です) |



〈図 12〉 日直の挨拶の様子

上記(A)～(F)以外にもアレンジをした挨拶があるが、一般的には上記の挨拶を中心に行う。上記(A)～(F)は中学校の英語の授業で行う一般的な挨拶であるが、例えば(C)の質問での答えは **fine** 以外にもたくさんあり、その多くの語彙を小学校で学習することによって、中学校の英語の授業にも良い効果が期待できる。また(D)～(F)の月や数(序数)、また曜日や天気なども英語学習の基本事項であり、こういった部分の学習もとても大切である。

③**フォニックス指導**：平成 24 年度に、熊取町教育委員会が外国人 3 名と協力をして「くまどりフォニックス」を開発し、町内全小中学校に CDR を配布して、音と文字の指導(フォニックス指導)を全小学校において行っている。この指導を行うことにより、児童の多くが英語のアルファベット読みと実際に言葉を発する時の音読みの違いを少しずつ認識できるようになってきている。

④**チャンツ、ゲーム、英語の歌、ICT 機器等の利用**：授業の最初のウォーミングアップとして楽しい英語のチャンツや歌を取り入れたり、Skype や大型モニター等を使った最先端の ICT 英語授業を行うことによって、学習意欲の向上を図っている。

⑤**ペア学習やグループ学習の効果的活用を通じた活動中心の授業の流れ**：



〈図 13〉 英語ルームの様子

効果的なペア学習やグループ学習を活動に取り入れることによって、コミュニケーション活動のさらなる充実を図り、場面意識や相手意識を大切にした英語を話す活動を多く取り入れている。

図 13 は、英語ルームの様子である。教室には大型ディスプレイや PC 等の ICT 機器が常備されている。またアルファベットの大文字や小文字、月や曜日、数などの掲示物も丁寧に掲示され、英語活動の雰囲気づくりに貢献している。

3.3 熊取町立熊取南中学校の実践

熊取南中学校においても、週 4 時間の内 1 時間程度を活用の時間とし、「英語を使う」授業改善を図り研究を進めた。1 年～3 年までの各学年、各学期における達成目標を明確化し、中学校卒業段階でのゴールを設定した。特に大切にされたことは英語の 4 技

能（聞く・話す・読む・書く）のバランス育成である。従来の授業では、話す力の育成の部分が弱かったため、そこを改善するための方策として、課題を設定しながらプレゼンテーションをする場を多く設けた。また英語ルームを整備し、電子教科書での授業や ICT 使った工夫ある授業を行いながら、生徒たちの関心・意欲を高めた。また歌・チャンツ・ゲーム・映画などを利用するとともにスピーチコンテストの実施、各種多様な掲示物の英語化など英語を日常化していく工夫を行いながら、「英語を使える」能力を育成した。また全員に教科書準拠の家庭学習音声 CD を配布し、英語能力判定テストを行った。平成 25 年度の 3 年生において、英検 3 級程度に相当すると判定された生徒の割合は 40% を超えており、これは明らかに 3 年間の取組や研究の成果である。生徒達の学習意欲を向上させるためには授業の工夫・改善はもちろんであるが、それを取り巻く環境を整備することも大切である。熊取南中学校においては、大きく 2 つの点の改善を図った。まず 1 つめは、プロジェクターや PC・DVD プレーヤー・電子黒板等を常設した英語ルームの環境整備である。2 つめは、多種多様な掲示物（例：体育大会の感想・今年の目標等）を英語で表現し、掲示する取組を行った。図 14 は、熊取南中学校における英語ルームの様子である。プロジェクターを完備しており、電子教科書で授業をしている。座席配置はコの字にしており、自由に発言のしやすい雰囲気を作っている。また、英語ルーム内の掲示物にも工夫をしている。図 15 は、英語ルームの後の様子である。パーテーションで区切って DVD プレーヤーや PC を常時 5 台設置し、各自が個別に英語学習を行うことのできる環境づくりをしている。このような ICT 環境を整備することによって、生徒たちは意欲的に学習に取り組むことができるようになってきている。



〈図 14〉 英語ルームの様子（前）



〈図 15〉 英語ルームの様子（後）

その他にも学校全体で英語の掲示物の工夫も数多く行っている。熊取南中学校では英語を日常化する取り組みとして、学年の目標や感想なども全校的に英語で書いて掲示している。このような取組を行う事によって、よく使う日本語に合う英語表現を学ぶことができ、また掲示をすることにより、友だちの英語表現も学ぶことができる。

4. 実践の成果と今後の課題

4.1 熊取町立東小学校と熊取南中学校の研究の成果と課題

実践研究校の熊取町立東小学校と熊取町立熊取南中学校の児童・生徒を対象に平成23・24年度にアンケートを行ったが、以下そこから見えてきた成果と課題を報告する。

まず成果であるが、「英語を使えるようになることは大切だと思う」「英語を使えるようになることは将来必要だと思う」といった質問に対して、「そう思う」「ややそう思う」と答えた児童・の割合は小学校で約90%、中学校で約80%と高い数値がでていいる。また「英語の授業中に、ネイティブスピーカーや外国語指導助手の先生とするコミュニケーションは楽しい」という質問に対して、肯定的に回答した児童・生徒の割合は小学校で約95%、中学校においても約70%と高い数値がでていいる。実践研究校の児童・生徒は日頃の取組の中で、英語の重要性を認識し、またネイティブスピーカーや外国語指導助手とのコミュニケーションの楽しさも感じている割合が高い。

課題としては、「英語は好きだ」といった割合が小学校5年生から中学校3年生までの間で43.6%低下している。その理由として、「ネイティブスピーカー や外国語指導助手が英語で話している内容がわかる」といった質問に対しての肯定的な回答の割合の低下があげられる（小学校5年生から中学校3年生まで36.3%の低下）。ネイティブスピーカー等が話をしている英語がわからなくなるとともに、英語の好意性が低下している。また「英語の授業でわからないところがあっても、たずねないでそのままにしておく」と回答した児童・生徒の割合も小学校で約25%、中学校で約32%存在している。また、「英語を使って自分の考えを伝えることができる」という質問に対しての回答もまだ低いのが現状である。つまり、多くの児童・生徒は、「英語を使えるようになりたい」と思っているが、英語がわからなくなり、好意性が低下している可能性がある。そしてそういった部分が原因で「英語を使って自分の思いを伝えること」ができなくなっている可能性が高い。今後は、小学校で外国語が教科になるにあたって、この部分を解消させる取組を丁寧に考えていかないと、英語嫌いを増加させる可能性もある。小中の段差を解消するためのカリキュラムの工夫や教職員の力量向上、また質問をしやすい環境づくりを丁寧に行う必要がある。

4.2 結論と今後の課題

熊取町においては、小学校外国語活動の教科化に向けて、10年程前から研究を行ってきた。北小学校における全校体制での研究、また使える英語プロジェクト事業研究推進校の研究等、様々な取り組みを工夫し実践もしてきた。

「英語を楽しみながら、日常化する工夫」をコンセプトに人的配置の充実（NET4名、JTE3名）、カリキュラムの作成（WEBページの立ち上げ）、小中連携した公開授業・研究授業の充実、またモデル授業を中心とした実践的な担当者会や研修会等も多く行っている。現状では、少しずつ研究の成果も出てきているが、まだまだ課題も多く見受けられる。

北小学校と使える英語プロジェクト実践研究校2校には、共通の成果と課題が見受けられる。良い部分はさらに伸ばし、課題を改善する取組も教育委員会がリーダーシ

ップを發揮しながら推進していく予定である。

具体的には平成 26 年度からは、全小中学校における CAN DO リストの作成（達成目標の明確化）・全小学校における公開授業の実施（教職員の力量向上）・大学等関係機関と連携をした小中合同担当者会や研修会の充実（小中/外部機関との連携）、家庭学習の工夫等を中心に、少しでも「児童・生徒の英語能力を向上させる事ができるような授業の充実・教職員の力量向上」をキーワードに、発達段階に応じた丁寧な「フォニックス学習やライティング学習」等も取り入れ、また充実したカリキュラムの工夫改善に努めながら、2020 年度の教科化に向けて努力をしていくつもりである。